

グループでの学びを支援する学習評価の在り方 —授業設計シートを活用して—

岡田 昭彦*

Teruhiko OKADA

Utilizing Lesson Plan to Evaluate the results of Group Learning Support

—By Using Lesson Planing Sheets—

ABSTRACT

文科省は、「主体的・対話的で深い学び」の実現をかかげている。そこで、「対話による深い学び」の実現を目指すために、「授業設計シート」を活用した授業者による形成的な評価を試みた。

中学校第2学年「世界から見た日本の資源・エネルギーと産業」単元において、学び合いに形成的な評価を活用した。具体的には、教室から1グループを取り出し、別室で授業者の司会による学び合いをした。授業者は「授業設計シート」を活用して、形成的な評価を行うことで、深い学びの実現を目指した。「授業設計シート」には、1. 学習主題、2. 学習内容（構成概念）、3. 焦点化された事例、4. 認識の視点、5. 学習内容の構造化、6. 問いの構造化の項目を用意した。普段の授業で、グループでの学びに十分な支援ができない状況の中で、概念的な知識の習得を実現する実践を目指した。

【キーワード：深い学び、グループでの学び、授業設計シート、形成的な評価】

I はじめに

現在求められている「主体的・対話的で深い学び」についての議論は、社会科でも盛んになされており、平成29年度に告示された「中学校学習指導要領解説社会編（以下、解説社会編と略）」では、これまでの言語活動の充実などの形で教科を超えて図られてきた学習活動の改善が、引き続き『社会的な見方・考え方』を働かせる中で、社会科ならではの「問い」として設定され、社会的事象に関わる課題を追究したり解決したりする活動を取り入れることによって実現することが求められる¹⁾と記載されている。

島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程社会科部では、社会との関わりを意識して課題を追究する力、「社会的な見方・考え方」を働かせて物事を選択・判断する力、他者と協働する力、持続可能な社会づくりの観点から諸課題を解決しようとする態度など、多様性を生かしながら、主体的、論理的に問題を解決していく資質・能力が求められると考えてきた。さらに、問題解決能力を育成する上で、「社会科における汎用的な概念」を形成することが重要と考えた。「社会科における汎用的な概念」とは、様々な問題解決の場面で、思考したり、判断したり、行動したりする際の基準となり、問題解決に活用できる質の高い知識と捉えてきた。

なお「社会科における汎用的な概念」は、教え込みで身に付くものではなく、生徒自らが、思考・判断する中で、繰り返し活用していくことで、次第に習得していくものと考えてきた。すなわち、「思考力・判断力を働かせて、知識の質を高める学び」、「思考力・判断力と知識

とが一体となって高め合っていく学び」の在り方が今まで以上に重要となってくると考えてきた。そのために単元で生徒に育みたい資質・能力を授業者が明確に持って授業を構想してきた。「さらに生徒の思考力・判断力を活性化させるために、生徒がいったん習得した知識や価値観を主体的に問い直すことが有効と考える。それまでに生徒がもっていた、問題に対する知識や価値観では、説明できない場面に出会ったときに生徒は自分の考えを問い直そうとする。そこでは、それまでの知識や概念を総動員し、新たな知識を取り入れ自分の考えを再構成することで、問題に対して説明できるようになる²⁾と記載されている。「再構成」を、すでにあるいくつかの知識や価値観を一つにまとめ直すことと考えてきた。その上で、いくつかの社会的事象の特色や意味、理論などを含めた概念を再構築していくことで、社会科における汎用的な概念の獲得につながると捉えてきた。

だからこそ、生徒自らが、自分の知識を再構築していくことが「社会科における汎用的な概念」の形成には必要と考えてきた。そこで、協働的な学びの場（以下：グループでの学び）を設定し、生徒が社会的な見方・考え方を働かせながら、自分の考えを説明したり、他者の意見を聞き、自分の考えを修正したりしながら知識の再構築を図っていくようなグループでの学びの工夫を行ってきた³⁾。このように島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程社会科部では、「対話による深い学び」の実現を目指してきたが、今までのグループでの学びでは、その場での評価やきめ細やかな指導が行えない部分もあり、学習内容（構成概念）を身につける思考や判断を促す難

* 島根大学教育学部附属義務教育学校 後期課程

しさを痛感し続けてきた。

そこで、本稿で取り組んだのは、「対話による深い学び」を実現するため、形成的な評価を活用することである。まず授業で目指すべき「深い学び」を具体的に示した授業設計シートを作成し、そうした学びの姿をもとに、生徒が社会的な見方・考え方を働かせるように形成的な評価を行い、グループでの学びにフィードバックとして返すこととした。本稿で報告するのは、第8学年の1グループに対して授業者が司会として入り、形成的な評価を行った実践である。

Ⅱ 「グループでの学び」と「形成的な評価」のつながりについて

1. 授業における「グループでの学び」の問題意識

普段の社会科の授業において、「グループでの学び」は、社会認識を育成する上で欠かせない学習形態である。それは、社会問題を解決する上で、対話によるコミュニケーションが問題解決に多く用いられるからである。このことを考えると、特に社会科の学びは「グループでの学び」によって「深い学び」となることが理想と考える。本実践の「深い学び」とは、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動のことである。具体的には、社会科各分野の特質に根ざした追究の視点と、それを活かした課題の設定、諸資料を基にした多面的・多角的な考察や構想、理論的な説明や議論などを通し、社会的現象の特色や意味、理論などを含めた概念に関わる知識を獲得するような学習の過程によって起こるものと述べられている⁴⁾。

しかし、普段の授業では1学級8グループあり、常に1グループを支援し続けるわけにはいかない。そのような普段の授業のジレンマをかかえながら、日々、グループによる学びを実践している。そこで、習得する学習内容（構成概念）を明確にして、その習得のための形成的な評価を考えた。この形成的な評価は、グループでの学びを修正し、学習内容（構成概念）の習得へと導く学習改善に欠かすことができないものと考えた。

2. 本実践における「形成的な評価」と「授業設計シート」とのつながり

生徒の学習状況を評価するとき、社会科の学習指導では、子どもの学習状況を分析的にとらえる観点別学習状況による評価が行われる。学習指導要領に示す目標に準拠し、その実現状況を評価する『目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）』として実施することが基本である。この評価は、あらかじめ目標を分析して設定した評価規準によって目標がどの程度達成されたかを検討するものである。

本来、形成的な評価とは、学習の指導過程において学習の到達度を評価する。この形成的な評価を受けて学習活動と指導方法の軌道修正を行う。授業中の子どもの様子を見取って適切な言葉かけをしたり、授業の進め方を

修正したり、さらには補充指導を行ったりすることは、形成的な評価と指導が一体的に進められている例である⁵⁾。

本実践での「形成的な評価」とは、単元の教育目標を達成するために、1単元単位ではなく、1時間ごと、あるいは1時間の授業の中で、絶えず子どもの発言を評価した実践者の見取りによる主観的な評価のことである。学習改善や指導改善の指針のようなものである。評価と言えは単元の最後に行う総括的な評価が意識されることが多いが、子どもたちによりよい授業を保障するには、授業中の瞬間瞬間のリフレクションも重要ではないかと考え、教育目標の達成のため、1時間の授業の中で子どもの発言や変容、態度によって、声掛けや発問、学習形態、説明などを改善していくことである⁶⁾。このことは、子どもの言動を常に評価して学習改善や指導改善に有効であると考えた。しかし、グループ学習で議論している時に、生徒が議論の全体像を捉え、問題解決の進行具合を見極め、自分の経験と結び付け、既有知識にも気付き、自分の主張を意味あるものにして、発話する過程に「形成的な評価」を盛り込むことは、授業者の主観に依るところが多くなると考える。

本実践では、グループでの学びに形成的な評価を入れることで、ねらう学習内容（構成概念）の習得を目指している。

Ⅲ 本実践における授業づくり

1. 現代の諸問題

環境問題とエネルギー問題

2. 実践の対象

本実践の対象は、第8学年から抽出した1グループ（グループ5人）である。グループには、授業者が司会に入り授業者による司会と形成的な評価を行った。

3. 実践日

令和元年5月7日（火）に実施した。

4. 単元名

「世界から見た日本の資源・エネルギーと産業」に関しての「日本の資源・エネルギーと環境問題」である。

5. 授業設計シート

1. 学習主題	島根県の資源・エネルギーと環境問題
2. 学習内容 (構成概念)	環境や自然に安全なエネルギー発電は、エネルギー発電効率が悪く、総発電量も少ない傾向にある。反対に、人々の生活に危険があり、環境や自然に悪いエネルギー発電は、総発電効率が良く、総発電量も大きい傾向にある。
3. 焦点化された事例	島根県三隅火力発電所の修理の期間の電力補充をどうするか。
4. 認識の視点 (見方・考え方)	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー発電は、自然や環境に「安全」なもの、「危険」なものがある。 ・エネルギー発電の「危険」は、「地形」や「気候」と強く関連がある。 ・エネルギー発電量は、自然や環境に「安全」ならば「少ない」、「危険」ならば「多い」傾向がある。 ・エネルギー発電の早急な課題は、「技術の進歩」や「技術革新」である。
5. 学習内容の構造化	<p>問い：原子力発電所は、これからの未来に必要なのか？</p> <p>↓</p> <p>知識：再生可能エネルギーは総発電量が少なく、火力発電や原子力発電は総発電量が多い。</p> <p>↓</p> <p>思考：環境や自然に安全で、かつ発電効率の高い方法はないのだろうか。もしくは私たちが陥っている錯覚はないだろうか。</p> <p>↓</p> <p>判断：将来の島根県を創る皆さんは、環境や自然に安全でも、総電力発電量が少ないエネルギー発電方法か、もしくは環境や自然に危険でも、総電力発電量が多いエネルギー発電方法か、どちらを選択するか。</p> <p>↓</p> <p>学習内容：環境や自然に安全か危険かを考え、エネルギー発電方法を選ぶ必要がある。かつ総発電量が人間生活に影響のない量であるかも考える必要がある。「技術の進歩」が早急の課題である。</p>
6. 問いの構造化	<p>Q:原子力発電所は、これからの未来に必要なのか？</p> <p>↑</p> <p>SQ:各発電は、電力量がどのくらいあるのか？</p> <p>↑</p> <p>SSQ:主な国々は、どのような発電で、どの</p>

<p>↓</p> <p>SSQ: 島根県の総電力量はどれくらいなのか？</p>

6. 本実践の課題 (争点)

課題 (争点) : 島根県は、浜田市三隅火力発電所で電力エネルギーを供給している。この度 (2018年7月1日)、電気自動車やスマホなどの普及による電力量不足に対応するため、2号機を増設し、2022年の稼働を目指していた。しかし、石炭を使用する火力発電は地球温暖化の促進になるので、CO₂基準値が厳しく、予定した完成期日に稼働することができなくなった。そこで、改良することにしたが、稼働まで3年延期することになった。年々、電力消費量は増え、3年間対策を取らざる終えない状態になった。

こうした事例をもとに、生徒に以下のA、B、の選択肢を提示し、議論を行うこととした。(本事例は、2号機を増設し、2022年の稼働を目指している事実を基にして、作成した架空のものである。)

- A : 水力・風力 (再生可能エネルギー) を増設する。そして、午後7時~10時まで計画停電を3年間する。
- B : 現在、稼働していない島根原子力発電所を3年間稼働させる。そして、計画停電はなし。

7. 本実践の1時間の学習の流れ

本実践は、次の(1)~(6)のような流れで学習を進めた。

- (1) 前時までに作成したワークシート① (資料1参照)を確認する。
- (2) 教室を出て、別室で5人は向かい合って座る。
- (3) 授業者の司会のもと、グループでの学びをすることを確認する。そして、学びの目的も確認する。
- (4) グループでの学びをする。
- (5) グループでの学びの内容は、ワークシート② (資料2参照)にメモしていく。
- (6) ワークシート②を活用して、振り返りをする。

IV 形成的な評価を行っている場面

1. グループでの学びで形成的な評価をしている授業者と生徒のプロトコル

表1 グループでの学びの場における授業者と生徒の会話のプロトコル

順番	生徒	生徒の発言内容
1	X	私はBの主張です。それは、風力は天候に左右される。再生可能エネルギーだと発電量が不安定になり、時には計画停電が3時間ではなく、4時間、5時間になる可能性があるからです。他の発電方法を見ても、水力は発電量が

2	Y	<p>少ない。火力は二酸化炭素の排出量が多い。このすべてをクリアしているのが原子力だと思います。他と比べて、天候にも左右されないし、発電量も多いし、二酸化炭素の排出量も少ないからです。</p> <p>私の主張はBです。私が気になっているのは、フランスは77.6%も原子力で電力を起こしていることです。EUは国が密集しているのに、原子力を使っているということは安全なのではないかと考えたからです。</p>	9	T3	<p>光発電やバイオ発電の割合が今より大きくなっていましたので、ここ数十年の間に技術進歩があると考えます。</p> <p>今、一通りみんなに主張してもらいました。ここからは、基本AからBへ、BからAへ質問をしてみたいと思います。いかがでしょうか。</p>
3	Z	私の主張はBです。さっきも言われたけど、EUとフランスの関係を見ても、原子力は安全であると思う。EUは人口が密集してるけど、島根は人口が少ないからです。	10	X	ブラジルと日本では、総電力量に差がある。ブラジルより日本は3000W以上の総電力を発電している。この差をどのようにして埋めるのか。
4	T1	安全か、危険か、という視点ですね。つまりは、こういうことかな。EUは人口密集地帯で原子力発電を行っているので、それに比べると、島根県は人口が少ないから、もっと安全である。こういうことかな。	11	W	そこは、島根県でしていない地熱発電をしたり、さらに風力発電を強化したり、他の再生可能エネルギーも考えていきます。
5	Z	はい。	12	T4	<p>他の再生可能エネルギーというと、太陽光発電ですね。これは島根県でもあります。あと、太陽熱発電やバイオ発電、そして潮の満ち引きを利用した発電などがありますね。</p> <p>バイオマス発電は、一度使ったものをリユースしたりするものが多いです。例えば、木くずや家畜の糞などがありますね。</p>
6	W	私の主張はAです。島根県はダムが多く、水力発電は増やせそうと考えます。そして、火山があるので地震も考えると、原子力発電は危険です。福島原発のこともあります。また、島根県は温泉も多いので、地熱発電もできると考えます。	13	T5	Xさんは、安全危険の視点ではなく、総発電量の視点で再生可能エネルギーの弱さを指摘しましたね。今のWさんの答えを聞いて、Xさんはどう思いますか？
7	T2	安全か、危険か、それに地形や資源の視点が入ってますね。つまり、福島原子力発電所の事故のことですね。津波の自然災害から事故につながり甚大な被害だったです。今も風評被害は続いていますからね。	14	X	それは、具体的な資料をもとにした発言ですか？
8	V	私の主張はAです。ブラジルは70%以上が水力発電である。日本の川は、数が多く、流れが急なので、ブラジルから技術を学び、日本に活かすと発電量が増えると考えます。また、2030年発電方法の予想の資料を見ると、太陽	15	T6	もう1人のAを主張しているVさんは、どう思いますか？
			16	V	まだ、今言ったような原子力以外の発電方法はしたことの無いものもあるので、具体的にはわかりません。でも、ブラジルよりは川が多く、急なので、水力は伸ばせると思います。
			17	T7	今、Vさんが言ってくれたのは、ダムを作って、高いところから水を落とすことで、タービンを回して発電する水

		<p>力発電ではなく、水車のようなイメージですか。つまり、川の勢いある流れを利用して、水車を回して発電するというイメージですね。</p> <p>なかなか未来のデータはないですね。しかし、ブラジルと総電力が違うので、そこを埋めていくというのは大事なことですね。他にないですか。</p>
18	V	<p>フランスは地震が少ないので原子力発電はいいと思います。しかし、日本は地震も多いし、津波もあるので、フランスに比べて安全ではないと思います。そこはどうですか。</p>
19	X	<p>確かに地中海までは地震も多いのですが、フランスは少ないです。それに対応するには、初期費用は掛かりますが、十分な耐震工事や対策、津波による被害のシミュレーションなどを強化する必要があります。</p>
20	T8	<p>Yさん、どうですか。</p>
21	Y	<p>十分な調査をして、津波などの災害に対応します。</p>
22	Z	<p>津波に対応して、原子力発電所を山の中に作ればいいと思います。</p>
23	V	<p>福島原子力発電所の事故でわかるように、耐震や津波防止などを行っていても、あのような事故が起きてしまった。どんなに地震に対する耐震、津波のシミュレーションをしても防ぐことができない災害がきたら、どうしますか。</p>
24	T9	<p>確かに山の中に原子力発電所ができるといいですね。今は、発電するために大量の水が冷やすために必要です。したがって海水を利用しています。だから、海のそばに原子力発電所は多いです。この後、技術革新がある、山の中でも大量の水を確保できることができれば立地条件の1つをクリアできます。</p> <p>また、福島原発の事故も人間が想像した以上の津波が襲ってきました。つまり、この異常気象の中、私たちがど</p>

		<p>こまでの自然災害を想定して準備をするのかも大切なことでしょうね。勝手にまとめて、すみません。</p>
25	T10	<p>この後、振り返りを書いてください。今まで行った対話で知識が深まったり広がったりしたことがあれば、書いて下さい。また、なければ感想などでも結構です。</p>

2. プロトコルからの考察

・X1は、発電量という視点から原子力発電が最適であるという結論に至りました。しかし、原子力発電は、発電量だけで最適と考えていいのでしょうか。また、Y2は、EUの中のフランスの国土の位置から人体や環境に影響があるないという視点で原子力がよいという結論を出しました。この視点だけでいいのでしょうか。さらに、Z3は、鳥根県は人口も少ないので、フランスより安全であると結論付けました。3人とも1点からしか問題を見ていないと授業者は考え、別の視点でも考えることができるように議論を整理する支援が必要と、T1の発言をした。「安全」「危険」という視点は議論する上で必要な視点である。この視点と「人口」が深く関わっていることを示すことで、X、Y、Zに自らの学習の到達度を振り返らそうとしている。その後、Wも上記の視点を持ちながら発言をしている。

・W6は、鳥根県の自然環境に着目して、河川（ダム）、地震、地熱などを発電に利用しようとしている。また、福島原発の津波による事故によって、人体や環境に危険がある視点はもっている。しかし、発電量という現実問題の視点は、まだない。しかし、W6の普段の学習成績などから、W6の考えをまとめるだけで別の視点ができる授業者は考え、一旦議論をまとめる支援をしている。T2のまとめ支援の後、確かにW11を見ると、すでに発電量という視点が入っているし、再生可能エネルギーは発電量も少ないというという視点もあるので、授業者の議論をまとめる支援は、別の視点をWに生むきっかけをつくっている。

・T4は、生徒どうしの対話をつなぐ説明をしている。この対話をつなぐ説明は大切である。発電方法の現状や種類の説明、相手の発言の文脈などを理解できるように説明を入れている。この対話をつなぐ説明を授業者が補っている。

さらに、発言をした生徒以外の生徒が発言内容を理解できているか問いかけることや、言葉に発しない表情やしぐさから理解を読み取ることが大切になってくる。生徒どうしのグループでの学びでは難しい部分である。

・T5は、ブラジルの話題から「総電力量」という視点を取り上げた。そして「根拠となる資料の提示」の重要

性を投げかけた。この「総電力量」は再生可能エネルギーの弱点となると考え、「根拠となる資料の提示」は総電力量において、再生可能エネルギーより原子力エネルギーの方が有利であることに気付かせるような、授業者が思考を促す支援をしている。

・T7は、V16の発言を聞いて、ブラジルと日本の川を大きさではなく本数だけで判断していると考えた。そして、ダムによる水力発電は日本ではブラジルのようにならないことをV16は気付いていなかった。そのためT7の発言は、川の流れを縦に利用するのではなく、横に利用する水車がイメージできるように思考を促す支援した。

・T9は、V23により、想定外の自然災害が来てしまえば、十分な耐震工事や対策、シミュレーションなどは意味がないという結論に達している。これでは、新しい発想、新たな技術革新に向かっていくという単元の内容「エネルギー発電の早急な課題は、『技術の進歩』や『技術革新』である」ことに迫ることができないと授業者は考えた。これでは、5人とも単元目標や内容を十分に理解できないと考え、T9のように、新しい視点へ思考を促す働きかけをしている。この支援により、生徒の振り返りをみると「技術の進歩」という視点が入っている。

3. グループの筆記による振り返り

Zさん

ダムではなく、日本の川の特徴を生かした発電方法のことを知って、すごいと思った。フランスでも使っているという理由付けだけでは、たりなかった。

Vさん

Bの意見を聞いてみて、確かに風力や水力などでは、日本に必要な電力を補えるという保証はないし、島根なら人が少なく被害も少しで済むという点に納得しました。どちらの意見にも、メリットデメリットがあるので、そこを上手に活用していけるといいと思います。これから、もっとグループディスカッションができるといいです。

Xさん

Aの人の意見から防ごうと書いていても防ぐことのできないものもあるのだということを感じたし、そこまで考えがなかった部分もあったので、そこは、もっと改善していき、もっと人を納得させられるプレゼンを作っていきたいです。

Yさん

フランスの現状だけでは原子力が安全である理由付けが弱かった。1つのデータだけではなく、造山帯の地図データなど複数の資料を見て、理由付けが必要であると感じた。ただ、私には、難しいことです。

Wさん

福島のようにならないため、日本の豊かな自然を利用した発電方法を考えていくことは大切である。ただBの人がいうように、再生可能エネルギーでは日本の発電量を補うことができないのも確かである。バイオマスもそうだが、とにかく技術の進歩が必要と話して感じていた。

4. 振り返りからの考察

Zさん：日本の川の特徴を活かした水力発電の知識は習得された。しかしながら、フランスと日本の総電力量に差があるところの視点は抜けている。

Vさん：風力や水力発電量で電力を補っていくことは難しいという知識を習得していた。さらに、原子力や風力、水力発電に「危険」「安全」両面あることも理解していた。

Xさん：地震に備えた耐震、津波に備えた堤防など様々な防衛策を考えても、想定を超える自然災害がくれば防げない。「危険」「安全」「地形」の視点が入っている。

Yさん：私には難しいと書いている。しかし、「安全」という根拠を示すには弱かったと感じている。このことは「安全」「危険」の視点がしっかり活かされている。

Wさん：「技術の進歩」が早急の課題であることを理解している。「安全」「危険」「地形」「総電力量」という視点がしっかり入って考えることができた。

プロトコルによる会話、振り返りの文字を総合すると、グループでの学びで、全員が学習内容（構成概念）を習得している。そして、Wは、さらに活用し、その先の課題「技術の進歩」まで導き出している。

V. 成果と課題

(1) 成果

本実践において、授業設計シートの作成により、学習内容（構成概念）等を明確にしたため、生徒が「安全」「危険」、「発電量の多さ」「発電量の少なさ」、「技術の進歩」の論争できる視点を持ち続けることができた。そして、「安全」「危険」の視点を中心にグループでの学習を進め、生徒は、日本で「安心」「危険」の話題を話し合うとき必要になる「地形」という視点にも気付いていった。「地形」の視点が出てきたことで「発電量の多さ」「発電量の少なさ」に全員が気付き、多面的な考察をすることができた。そして、グループでの学びがさらに進むと、日本は一体どれくらいのエネルギーを消費しているのか、という話題になり、「総発電量」の視点も出てきた。ここで学習内容（構成概念）を習得するための視点は、すべてに気付くことができた。これは、授業者の支援による議論の整理や生徒の思考を促す働きかけが大きく関わっていると推測できる。その根拠としては、授

業者がグループの司会に入らず、自分たちだけで話し合ったグループの一例を取り上げることで推測ができる。以下は、生徒の振り返り用紙からの抜粋である。

生徒 a：お互いに意見交換ができてよかった。

生徒 b：しっかり質問に応じることができたので、すごくよかった。

生徒 c：人それぞれのいろいろな見方・考え方をより深く知ることができました。

生徒 d：フランスでは77.6%は原子力のため、EUでも認められていた。

このグループの結論としては、7時から10時の停電はゲームができなくなるので、再生可能エネルギーではなく原子力発電所を稼働させる。現在も、稼働している原子力発電所はあるから、島根原子力発電所も稼働させればよい。しかし、一方では7時から10時まで、家はあまり電気を使わないので、再生可能エネルギーでもよい。このような結論になっている。

上記のグループは、資料を根拠に「安心」「危険」という視点は、出ているが、「発電量の多さ」「発電量の少なさ」、「技術の進歩」さらに「地形」という論争できる視点を持ち続けることができていなかった。そのため、論争できる視点がなく、結果、自分の生活体験を基にして、自分の立場を主張する話し合いになり、結論も生活体験を基にして出している。つまり、授業者が議論を整理すると、お互いの見方・考え方の相違がわかり、議論する視点を明確に理解することができるが、整理なしには難しいことがわかった。また、授業者の思考を促す働きかけは、議論する別の視点に気付いたり、別の視点に気付くきっかけになることがわかった。

つまり、生徒が自らの学習を振り返り、到達度を把握し、学習を修正・改善したりするために、授業者が議論の整理をしたり、生徒の思考を促す働きかけをしたり、根拠にしている資料の読み取りを確認したりすることは、生徒の学びを促進させるのに欠かすことのできない要因の一つと考えた。

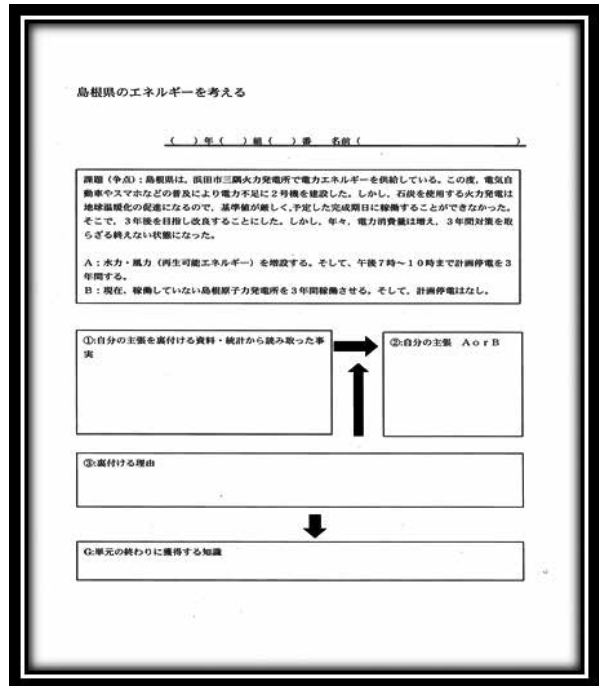
ただし、今後の課題として、さらに授業設計シートの内容項目を検討し、グループでの学びを支援する学習評価の在り方のもとになる枠組みを授業設計シートに組み込み、記載できる様式にしていく。そうすることによって、支援とは別に、必要である形成的な評価の精度を高めていくことができると考えている。

引用・参考文献

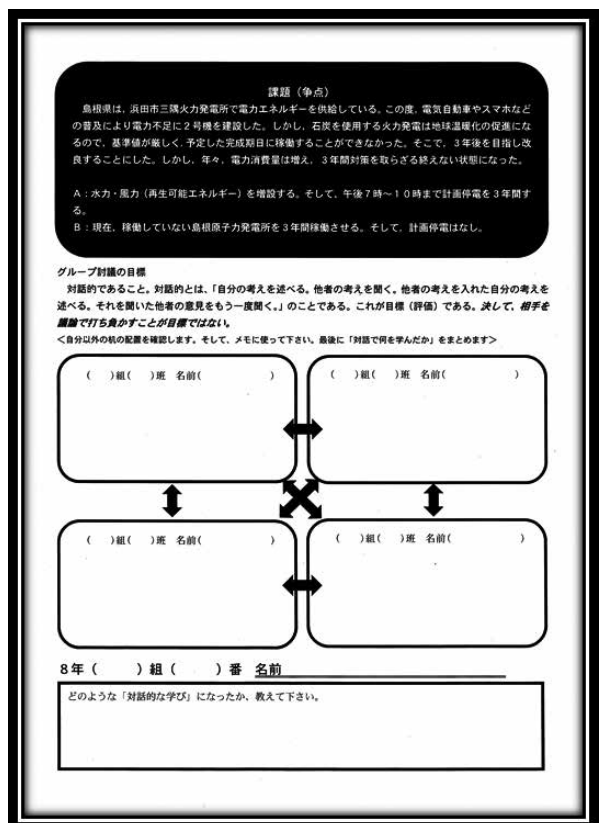
- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』学校図書、2018、16頁
- 2) 島根大会実行委員会『第50回全国中学校社会科教育研究大会島根大会研究紀要』2016、19頁
- 3) 島根大学教育学部附属義務教育学校社会科部『国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業研究協議会資料』2018、参照
- 4) 原田智仁編著『中学校新学習指導要領の展開社会編』2017、19頁 明治図書

- 5) 島根県教育センター浜田教育センター『学習指導の基本を身につけよう 授業づくりQ&A ～よい授業をめざして～』2011、9頁
- 6) 梅津正美 原田智仁編著『教育実践学としての社会科学授業研究の探求』2015、135頁 風間書房

資料1 ワークシート①



資料2 ワークシート②



資料3 単元の授業計画

●資源や産業の特色の授業計画		
時	学習テーマ (◎) と主な学習内容 (・)	おもな資料名
1	◎世界の資源・エネルギー ・世界の資源、エネルギーの消費と生産には、先進国の方が発展途上国より消費が多く、石油、石炭、鉄鉱石は限られた地域にある。地球温暖化により再生可能エネルギーに注目がおかれている。	・世界の鉱山資源の生産とエネルギー消費 (2011年) Energy Statistics Yearbook ほか
2	◎日本の資源・エネルギーと電力 ・日本では、資源を有効に活用するために、山間部には水力発電所を、臨海部に火力発電所を建設している。 ・2011年の東日本大震災をきっかけに原子力発電の見直しがされてきた。さらにエネルギー資源の少ない日本は、再生可能エネルギーに着目している。	・おもな発電所の分布 (2014年) 平成26年版 電気事業便覧 ・おもな国の発電量の内訳 (2011年) Energy Statistics Yearbook ほか
3	◎日本の農業・林業・漁業とその変化 ・日本の農業・林業・漁業には、就業人口の減少と高齢化の問題がある。また、貿易の自由化 (TPP) による農林水産業に安い外国製品が入り、日本の農林水産業はブランド化など対策を講じている。	・日本の食糧自給率の推移 (2015年版食糧自給表) ・日本の農業従事者人口の推移 (農林業センサス、農業構造動態調査)
4	◎地理研究 再生可能エネルギー ワークシート①を考える。 ・なぜ、今、「再生可能エネルギー」なのか。 ・再生可能エネルギーにはどのようなものがあるのか。 ・再生可能エネルギーの現状を調べよう。	・地理資料集 2018 世界 新学社 p22-25
5	本時 ◎島根県のエネルギー問題を考える ・環境や自然に安全なエネルギー発電は、エネルギー発電効率が悪く、総発電量も少ない傾向にある。反対に環境や自然に危険なエネルギー発電は、エネルギー発電効率が良く、総発電量も多い傾向にある。 ◆ワークシート②を利用した課題についてのグループの学び合い (20分)。 学び合いの説明 (10分)、振り返り (10分)。	・地理資料集 2018 世界 新学社 p22-25 ・中学生の地理 帝国書院 p154-157